

Title	中世の金融業者：メデイチィ銀行に関する近著の紹介
Sub Title	The banker in the Middle Ages
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.12 (1953. 12) ,p.1040(72)- 1047(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19531201-0072
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531201-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介

中世の金融業者

メデイチ銀行に關する近著の紹介

渡邊 國廣

メデイチ銀行は、第十五世紀における最大の銀行であつた。常に、イタリー内外の七、八カ所に支店を持ち、四、五十カ所に代理人を置いていた。又、フロレンスの本店には、十人から十二人の書記がいた。勿論、かかる数字は、今日における銀行の規模と比較した場合、決して驚くべきものではない。然し、依然として、メデイチ銀行は、當時における最大の銀行であつたのである。

メデイチ銀行にとつて、最初は、外國貿易・爲替手形の賣買が主たる業務であつた。然し、後に、預金が殺到し、投資のための適當な機會を見出すことすら困難な時期になると、代つて、國王に對する危険な貸付が行なわれるようになった。そして、この結果、メデイチ銀行は、破産した。總じて、中世における銀行の破綻の原因は、經營者の能力の有無よりも、國王

の返済不履行にあつたのであるから、メデイチ銀行の破産の場合も、決してその例外ではなかつたのである。

従来、メデイチ銀行に關しては、研究が少なく、僅かに「インの「碩學シーフェキンの研究」(Die Handlungsbücher der Medici) Sitzungsberichte der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften in Wien, Philosophisch-Historische Klasse, Bd. CII. No. 5, Vienna 1905. が擧げられるに過ぎなかつたが、最近ドック・ルーヴァー氏が、メデイチ銀行に關して絶好な小著「The Medici Bank: Its Organization, Management, Operations, and Decline.」[Business History Series, Graduate School of Business Administration, New York University.] New York: New York University Press; London: Oxford University Press: 1948. pp. XV, 98. を公刊し、從來において看過されて來たこの面について、満足すべき解答を興えて呉れた。

本稿においては、ドック・ルーヴァー氏のこの著を中心に、第十五世紀を通じて顯著な活動を示したメデイチ銀行に關聯し、その組織・業務及び崩壊について述べて見よう。

尙、著者は、これと前後して、中世最大の金融市場ブルジョエに關する一書を公刊している。本書については、既に、三田學會雜誌第四十六卷第十一號に紹介したが、中世における金融取引の實際を知る上に、同様に、看過し得ない一書であらう。

營に迄も關係していた程であつた。

第十五世紀のフロレンスには、異なつた四種類の銀行があつた。バンキ・デイ・ペンニョ、バンキ・ア・ミヌト、バンキ・イン・メルカト及びバンキ・グロッシイである。バンキ・デイ・ペンニョは、個人財産を擔保に、法定年利二割を以て貸付を行なう質屋であつた。バンキ・ア・ミヌトは、寶石の賣買を主たる業務とし、併せて、寶石を擔保とする貸付・地金の賣買・兩替を行なつていた。バンキ・イン・メルカトは、兩替を以て本務とした。最後のバンキ・グロッシイは、「貿易や金融が營まれる如何なる場所においても、世界のあらゆる部分において、商品や手形を扱つた。」寧ろ國際貿易が主であつた。そして、大規模なかかる進出のために、バンキ・グロッシイは、巨大な資本を擁し、複雑な對外關係を結んでいた。

メデイチ銀行は、固より質屋ではない。又單なる兩替商でもない。明白に、バンキ・グロッシイに屬するものであつた。メデイチ銀行は、既に、ジオヴァンニ・デイ・ヴィッティの時代に、ヴェニスとローマとに支店を持つていた。その子のコズイモは、ピサ、ミラノ、ジュネーブ、アヴィニオン、ブルジョ、ロンドンに支店を新設し、又ナポリ、ヴァレンシア、ポーザア、ジェノア、リュベック等々には、代理人を置いていた。同時に、メデイチ銀行は、フロレンスの毛織物工場・絹織物工場に出資し、又ローマ法王廳と共同して、明礬嶺山の經

業務に依るかかる分類とは別に、構造的に見た場合、第十五世紀のフロレンスの銀行は、二つの型に大別することが出来る。一方を、集中型と呼べば、他方は、正に、分散型であつたのである。集中型が、第十三・四世紀においては、寧ろ二股のであり、ベルツツイ、バルデイ、アッチャイオオりの各會社が、その例に屬した。この場合、會社が一つあるだけで、海外の各支店は、一個の使用人にしか過ぎない支店長に依つて、管理されてきた。支店長は、經營に際し、独自の立場を主張することが出来なかつた。これに反し、分散型の方は、多くの子會社の結合から成り、メデイチ銀行が、この型に屬した。メデイチ銀行は、フロレンスの本店、イタリー及び海外の各地にある支店並びにフロレンスの三つの工場から構成され、各々が獨立の子會社を形成していた。各子會社は、独自の稱號・資本・帳簿を持ち、全く別個の會社という觀があつた。

但し、政策の決定權は、各子會社の資本のうち半分以上を負擔することに依つて、メデイチ家の人々が掌握していた。メデイチ家の人々は、高級社員と呼ばれ、各子會社の經營には介入せず、僅かに政策面において全子會社を統率するのみであつた。一方、各子會社の長は、下級社員と呼ばれ、自己の主管する經營の責任を負い、子會社が擧げた利益からの配分を除けば、親會社より何等の報酬も受けていなかった。然し、各子會

社の長には、二年乃至三年毎にフロレンスの本店に来て、營業報告をする義務が課せられていたのであつた。

二四五八年の財産申告に依れば、コズイモ・デ・メディチは、十一カ所に出資していた。フロレンスにある本店・二つの毛織物工場・二つの絹織物工場・整理中の一會社及びヴェニス、ブルージュ、ロンドン、ジュネーブ、アヴィニヨン、ミラノの各支店に對してであつた。ローマ支店に關しては、出資はしてゐなかつたが、多額な預金に依つて、實際の支配者となることが出来た。そして、正に、コズイモの時代に、メディチ家は繁榮の頂點に達し、通信の困難が豫想されるこの時期に、適切にも經營を各支店に委ねるといふ措置によつて、ヨーロッパ全土に亘る統一ある金融網を完成したのであつた。

メディチ銀行の場合、各支店は、資本の半分以上をメディチ家の人々に負うことに依つて、政策面において干渉を受けていたが、經營面に關する限り、各支店は、とにかく獨立した子會社であつた。

例えば、ブルージュ支店の場合、出資者は、コズイモの二子とコズイモの甥の一人、前支店長のジエロツツォ・デ・ピリイ及び支店長のアンジェロ・タニであつた。そして、この五人に依つて、總計三、〇〇〇グロートの資本が醸出された。然し前支店長のピリイの出資額は、このうち、僅か六〇〇グロートであり、又支店長のタニは、五〇〇グロートを出資したに止ま

の止むなきに至つたのであつた。支店長の権限を大幅に擴大したことが、却つて、このように、不幸な結果を招くことになつてしまつたのである。

然し、一般に、支店長の自由が、このように、餘程に認められるようになった時期においても、依然として支店長は、二年乃至三年毎にフロレンスの本店に向く義務があつたほか、常に書簡連絡に依つて、爲替相場の變動・委託商品の賣行及び預金や貸付の状況を、本店に對し通報しなければならなかつたのである。資本の壓倒的部分を醸出してゐたメディチ家の人々が、各支店に對し、未だにこのように、隱然たる勢力を持ち續けていたのである。

メディチ銀行は、各地に支店を持つていたばかりではなない。ほかに、フロレンスには、三つの工場があつた。二つの毛織物工場と一つの絹織物工場とである。各織物工場の經營方式は、他部門における場合と全く同一であつた。各工場は、メディチ家の人々から醸出された資本と、直接の經營者が支出した資本とに依つて運営されていた。但しメディチ家の人々は、二つの毛織物工場の各總資本五、〇〇〇フロリンのうち、それぞれ二、五〇〇フロリン、二、二〇〇フロリンを、又絹織物工場の總資本五、〇〇〇フロリンのうち、四、二〇〇フロリンを負担することに依つて、とにかく各工場の支配權を掌握していたのであつた。

中世の金融業者

つた。資本の約三分の二に當る一、九〇〇グロートは、メディチ家の人々であるコズイモの二子とコズイモの甥の一人とに依つて、調達されたのであり、このように、資本の壓倒的部分を掌握することに依つて、メディチ家は、ブルージュ支店の實際の支配者となることが出来たのであつた。

利益の分配に際しては、六割がメディチ家に歸し、殘部が他の二人の出資者に均分された。従つて、支店長のタニは、出資額に比較して高率の配當を保證されていた。そして、正に、かかる措置に依つて、直接の經營者たる支店長に對する報酬が支出されたのであつた。

然し、一方、支店長のタニに對しては、多くのことが規定されてゐた。支店長は、取極に依つて、ブルージュに常住し、商用のためアントワープ、ベルゲン・オブ・ツォーム、ロンドン、カレー及びミッテルブルグに旅行することが許されたに過ぎない。又、貸付は商人や職人に限るべきこと、羊毛及び毛織物の購入額は、年間六〇〇グロートを限度としなければならぬこと等々が規定され、支店長の権限は、意外に制限されたものであつたのである。然し、後に、タニに代つて、トマソ・ポルティナリイが支店長となつた時、かかる制限は次第に緩和され、國王に對する貸付も認められるようになった。かくして、支店長ポルティナリイは、大膽王シャルルに對し、六、〇〇〇グロートの貸付を行なつた。然し王の敗死と共に、貸金の回収も不能となり、これが主たる原因となつて、ブルージュ支店は閉鎖

メディチ家の人々は、このやうに、各工場の支配權を掌握することに依つて、經營者も亦この要請に應じて品質の保持に留意した。従つて、販路は、自然と限定されざるを得ない。製品は、地方の商人やメディチ銀行の各支店に委託されたが、僅かにブルージュのブルグンド家が絹織物を、ミラノのフォルツァ家が毛織物を、大量に買つて呉れたに過ぎなかつた。

然し、勿論、メディチ銀行は、織物工業よりも、國際金融や外國貿易を重視してゐた。例えば、一四五八年には、國際金融や外國貿易に對し、二八、八〇〇フロリン以上を投資してゐたが、他方、工業出資は、七、八〇〇フロリンに過ぎなかつた。結局、メディチ家は、工場經營のほか、鑛山經營に迄も參畫してゐたといへ、商人銀行家であつて、決して産業企業家という程のものではなかつたのである。

三

然らば、メディチ銀行は、第十五世紀における最大の銀行として、實際に、如何なる業務を行なつてゐたのか。又、この業務を遂行するための資金は、如何にして調達されたのか。

一般に、中世において、銀行業者といふ場合、爲替手形の賣買に當る人のことであつた。中世の爲替手形は、割引されず、爲替相場に依つて決定される價格において賣買された。しかも、爲替相場の變動が、中世においては、意外に激しく、爲替

手形の賣買に依つて業者が獲得する利益は、極めて不安定なものであつた。爲替相場は、金融市場の需給關係に依つて影響されたから、業者は、常に、國際金融市場の狀況に詳しくなければならなかつたのである。

メデイチ銀行も亦、爲替手形の賣買を、業務の一つとしていた。メデイチ銀行は、イタリー内外の各地に設置している支店・配置してある代理人を通じて廣範な國際金融を營なみ、ヨーロッパ各地における爲替相場の差を利用して、爲替手形の賣買に依つて多額の利益を獲得していたのであつた。

同時に、メデイチ銀行は、許された爲替手形の賣買のほか、請われて融通手形を發行した。かかる融通手形は、貸付のための單なる口實にしか過ぎず、後に高利を貸る手段として非難された。然し、この融通手形の額面金額は、満期時に、一般の手形の場合と同じく、爲替相場に依つて決定された金額において返済されたのであるから、とにかく、このように、メデイチ銀行は、中世の銀行業者の例に洩れなく、金融業務からの利益において、甚だ不確定であり、多分に投機的であつたのである。

然し、メデイチ銀行は、單に、このように、爲替手形の賣買のみを、行なつていたのではない。同時に、外國貿易をも營なみ、寧ろこの面に對して、より大きな努力を傾けていた程であつた。

のである。

メデイチ銀行が、爲替手形の賣買を行なつていたこと、又大規模な國際貿易に従事していたことについては、既に述べた。然し、メデイチ銀行の活動は、單に、このように、國際金融・外國貿易の面のみに限られない。法王廳との交渉も亦、メデイチ銀行の業務において、輕視することを許されない一つであらう。

主として、ローマ支店が、法王廳との交渉に當つた。そして、早くも、ローマ支店は、法王廳の財務代理人たるの地位を獲得したのであつた。以後、ローマ支店は、同じメデイチ銀行下の各支店を動員して、法王廳への収入の回送や、法王の外國への補助金の支拂等を扱い、又法王廳への収入を見越して、法王に對し貸付を行なつたりした。例えば、一四七三年に、メデイチ銀行は、法王廳へ總計六二、九一八フロリンの貸付があつた程である。

同時に、メデイチ銀行は、法王廳所有の明礬鑛山の採掘を管理するようになった。そして、一四六六年に、メデイチ銀行は、法王よりトルファにある明礬鑛山の採掘と、その販賣の權利とを興えられた。然し、利益の獨占は認められず、販賣に依る利益の三分の二は法王に屬するという取極であつた。固より、メデイチ銀行は、かかる取極には満足しない。特に、ロレンツォは、鑛山を完全に支配することに依つて、イタリーに

中世における外國貿易は、一般に、危険率が非常に高かつた。従つて、中世商人にとり、危険の分散ということが、特に問題であつた。そのため、一般には、取扱品目を多數にし、且つ委託販賣にするという手段が取られていた。取扱品目を特定のものに限定せず、同時に多數のものを扱つて、危険率の集中を避けようというのである。

メデイチ銀行の場合も、決してその例外ではなかつた。例えば、取扱品目には、羊毛・毛織物・絹織物・明礬・染料・香料・オリブ油・柑橘類が含まれ、必需品と奢侈品とを網羅していた。しかも、メデイチ銀行は、この商品を、各支店及び他の商人に委託販賣させ、極力危険の減少を圖つたのであつた。勿論、盲目的に商品を委託分散するのではなく、各地に派遣してある通信員から、綿密な市場狀況の報告を受け、更に十分信頼し得る商人を見出して後に、始めて販賣を委託したのであつた。

このように、委託販賣が支配的であつたが、然し、固より、若干の例外はある。例えば、綴織の販賣が、例外の一つであつた。この場合、メデイチ銀行は、國王・貴族・聖職者及び大商人から綴織の注文を受け、注文分を綴織製造人に作らせ、製品を注文主に引渡すという形式を採つていた。その際、メデイチ銀行は、手数料を取つた。

とにかく、このように、メデイチ銀行は、外國貿易の面において、正しく當時のヨーロッパにおける指導勢力であつた

における明礬の獨占販賣を企てた。そして、このため、地元の反對を尻目に、隣接の明礬鑛山を壓迫し、更には法王に迫つて、トルコ産明礬の輸入を禁止するよう要求した。最後に残つた競争相手のイスケア明礬鑛山の所有者と、ローマ支店は、以後二十五年間、供給過剰に依つて、價格の下落を起さないことを協定した。一四七〇年のこの取極に依つて、遂に、メデイチ銀行は、明礬の獨占販賣權を獲得した。以後約八年間に亘つてメデイチ銀行は、この獨占權を享受することが出来たが、事業を不當に擴大したため失敗し、遂に、一四七八年、法王廳は、メデイチ銀行の財産を沒收し、ここにメデイチ家の鑛山經營は崩壊した。

メデイチ銀行の資本は、前述した如く、如何なる支店においても、その半分以上をメデイチ家の人達が出資し、殘餘を幾人かの共同出資者が分擔していた。然し、メデイチ銀行の運轉資金について調べた場合、資本金を上廻る金額が、實際に利用されていたことが判る。例えば、一四七一年に、ブルージュ支店の資本額は、三、〇〇〇グロートであつたにも拘わらず、ブルグント公に對し、六、〇〇〇グロート以上の貸付を行なつていた。勿論、ほかに、ブルージュ支店は、貿易の決済・爲替の賣買のためにも、相當額の資金を用意して置く必要があつたから、運轉資金としてブルージュ支店が利用し得た金額は、資本金を遙かに上廻る厖大な金額であつたといはなければ

ならない。しかも、この種の事情は、他の支店についても、同様であつたのである。

然らば、資本金以外のこの膨大な資金を、メディチ銀行は、如何にして調達していたのか。この種の資金に對しては、取引から得られた利潤の蓄積分のほかに、出資者の出資金以外の預金、部外者の預金が當てられていた。例えば、コズイモと、その弟のロレンツォとは、フロレンスの本店に一〇、〇〇〇フロリンを、ヴェニス支店に一〇、〇〇〇フロリンを、預金していた。又一つの支店が、他の支店の預金者となる場合もあり、例えば、ヴェニス支店は、ミラノ支店の有力な預金者であつた。このほか、商人・貴族・聖職者が、遊金を好んでメディチ銀行に寄託した。外國人の預金も亦相當な額に達した。しかも、この種の預金に對しては、普通、八%から十二%の利率の配當が約束されていた。

とにかく、このように、メディチ銀行の資金は、かかる預金に負うところ大であつた。そして、メディチ銀行は、この借入金を含めた大きな資金に依つて、廣範な商業活動を行なつていたのである。然し、後に、金價格が騰貴し、メディチ銀行が、金を以てその利子を支拂はなければならなくなつた時、多くの借入金に依存していたことが、メディチ銀行にとつて、致命的な弱點となつたのであつた。

四

營業の不振に直面して、ロレンツォは、却つて、局面の打解を、益々困難なものとした。ロレンツォは、預金を増加して、金に依る利子支拂の負擔を、益々大にした。又、明礬嶺山の事業を擴張して、銀行責任を増大した。

然し、ロレンツォの犯した失策のうち、最も重大なものは、ロレンツォが、各支店の好んで行なつて諸侯に對する貸付を、放任した點にあつた。現に、各支店は、營業不振の際にも拘わらず、諸侯への貸付を新たに始めた。しかも、この過度の貸付の大部分は、容易に返済されなかつた。そして、結局、このため、各支店は、次々と閉鎖を餘儀なくされた。ブルージュ支店は、大膽王シャルルに對する貸付のために崩壊した。ロンドン支店は、エドワード四世に對する貸付のために失敗した。このような相次ぐ支店閉鎖に依つて、メディチ銀行の存続は危うくなつた。そして、結局、一四九四年フロレンスにおける暴動の時、本店は暴徒に依つて襲撃され、膨大な財産も没收されて、ここに、メディチ銀行は、遂に没落してしまつたのであつた。

メディチ銀行の没落原因について、マキアヴェリイは、大著フロレンス史において、總支配人ロレンツォの經營能力の不足と、各支店長の勝手な行動とを、強調した。事實、ロレンツォは、全く無能な支配人であつた。又、事實において、各支店長の行動は、計畫性を缺いていた。そして、その經營者の無能

メディチ銀行は、第十五世紀における最大の銀行として、多方面に顯著な進出を示していた。然し、第十五世紀の後半に入ると、最早やメディチ銀行は、従来の繁榮を維持することが出来なくなり、衰退の一途を辿るばかりであつた。

衰退の主要な原因は、金價格に起つた變動であつた。特に、一四六五年以降において、金價格の騰貴が著しかつた。しかも、一四七五年から一四九五年の間においては、金の銀に對する交換率が、二十%以上も高騰した。このことは、メディチ銀行にとつて、非常な打撃となつた。第一に、金價格の上昇に依つて、商品の金價格が著しく下落したことが、大きな打撃であつた。しかも、メディチ銀行の取引の大部分が、金本位のフランス、フランドル、イギリスにおいて行なわれていたということが、金價格の高騰に依つて、メディチ銀行が蒙つた打撃を、一層深刻なものとした。第二に、金價格の騰貴に依つて、預金者に對する金に依る利子の支拂が、メディチ銀行にとつて、非常な負擔となつた點であつた。しかも、メディチ銀行の資金の多くは、預金に依存していたから、金價格の上昇に依つてメディチ銀行が蒙つた損害は、莫大な額であつたといわなければならない。

なるほど、原因は、このように、貿易に依る利益の減少、支拂うべき利子額の意外な増加にあつた。しかも、無能なロレンツォが總支配人となるに及んで、事態は、急速に悪化し、殆んど破局も免れない程であつたのである。

ということが、マキアヴェリイの指摘した通り、メディチ銀行崩壊の重大な原因であつたことは、疑いない。然し、それは、飽く迄も、原因の一つであつた。メディチ銀行の衰退に對しては、このような一つの原因のみが影響したのではなく、寧ろ複雑な事情が作用したのである。より具體的には、既に述べたように、金價格に起つた變動に依つて惹起された困難な事情が、メディチ銀行衰退の主たる外的要因となつたのであつた。金價格の高騰に依つて商品の金價格は下落し、メディチ銀行は、貿易に依る収入の減少に悩まなければならなかつた。又、金價格の暴騰に依つて、メディチ銀行は、金に依る膨大な預金利子の支拂に苦慮するようになつた。そして、この打撃策として、メディチ銀行は、諸侯に對する貸付を、開始した。然し、この貸金が、正確に返済されたということはなく、従つて、貿易に依る収入減を補填し、或いは、不當に膨脹した支拂利子額を拮出しようとして探られたかかる策が、メディチ銀行にとり、却つて、不幸な結果を招くに至つたのであつた。一般に、中世の金融業者の失敗が、私金融から政府融資への關心を移した際に起つたといわれ得るとすれば、メディチ銀行の場合も、正しくその例外ではなかつたのである。